

むかし、ふたりの鉄砲打ちがいました。ひとりには万治まんじ、もう一人は磐司ばんじといいました。ふたりは、名前は似ていましたが、することは何もかも違っていました。万治は山へ行きさえすれば、どんなけものも、思うようにとることができました。けれども磐司はなかなかけものをつかまえることができず、いつも万治にばかりにされていました。

あるとき、万治が山へ行くと、美しい女が岩に寄りかかって、苦しんでいました。

「お願いです。赤ん坊が生まれそうなのです。のどがかわいてたまらない。水をいっぱいくんできてください」

万治は、

「とんでもない。狩人というものは、死人に会うよりもお産を嫌うもんだ。縁起でもない。きょうは、さっぱりだ」といって、ぺっぺっと、つばをはいて、さっさと行ってしまいました。

そこへ、磐司がやってきました。磐司は女に気づくと、

「どうした。ひどく苦しそうだけど」とききました。女は、

「赤ん坊が生まれそうなのです。のどがかわいてたまらない。水をいっぱいくんできてください」といいました。

磐司はすぐに走って行って、沢に下り、木の葉を丸めて水をくんできました。女はよろこんで水を飲みました。それから、赤ん坊を十二人生みしました。生まれたばかりの赤ん坊は、枯れ葉の上をはいまわったり、ころげまわったりして、おもしろそうに遊んでいました。磐司は、おどろきました。

「なんと強い子どもたちだ。こんながんじょうな子どもは、見たことも聞いたこともない」

女は、また、木の葉の水を、ごくごくとうまそうに飲むと、にこっと笑っていいました。

「こまっているところを助けていただいて、ありがとうございます。わたしはこの山の神です。お礼に、おまえに、山の幸をあげましょう。これからは、山へ入ったら、『磐司、磐司』と自分の名前をいいなさい」

磐司は家に帰りました。

それからというもの、磐司が山へ入り、「磐司、磐司」とよびさえすれば、どんなけものでも、思うようにとることができました。けれども、万治のほうは、いくら山をかけたまわっても、うさぎ一匹とれなくなりました。

磐司は、十二人の赤ん坊にちなんで、十二月十二日を山の神さまのお祭りの日に決めました。それからは、山で働く人たちは、その日だけは山へ行かず、山の神さまをお祭りするようになったということです。

村上郁再話

資料『日本の昔話 10 遠野の昔話』稲田浩二／日本放送出版協会